

保育室のふんいき

及 川 ふ み

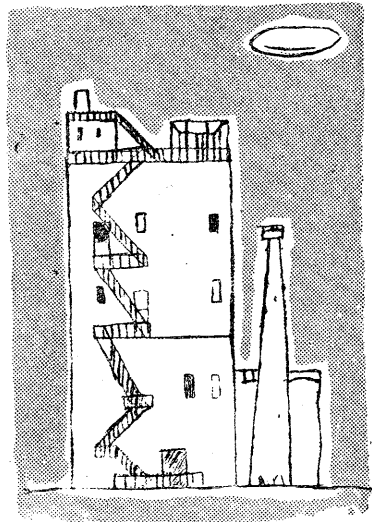
一、春のひざしを充分にあびた、あたたかい明るい保育室では、年長組になつた幼児が七、八人うれしそうに語り合いながら、粘土製作をしている。そのグループの中に大人（教育実習の学生）が一人まごつている。手を膝の上に組んでただ子どもたちの仲間にいるだけである。そしてその表情は、自分はどうしていたらよいかという不安定な様子でいる。

この保育室での、子どもたちのたのしいそしてはりきつた様子と、そのそばにいる大人の不安定な態度、この二つの不調和と云おうか、保育室のふんいきに、このあかるい、そしてあたたかい保育室に一まつの暗さが見える。

同じく子どもの仲間に入った大人であっても、教育とか指

導とかいう気持ちを全然もたない大人が、子どものこうしたグループに入った場合を考えると、或はその人その人の性格があらわれて、いろいろの形で、子どもとの接触がはじめられるであろう。ある人は素直に小さい人たちに積極的に進んで、何か作ってみせようとか、或は教えようなどの様子をして、自分の弟や、妹に対する気安さで入ってゆく場合もあるであろうし、又人によっては子どもは子ども、自分は自分ということと周囲の様子には無頓着に自分のもち味で進んでゆく人もあらうと思われる。

この保育室の粘土の仲間入りをしている大人は、自分は幼稚園の先生の卵であるという心がまえの所持者であるから、



気安な調子で手が出せないし、言葉も出せない。又やたらに自分だけで勝手に何かつくっているところまでもいいかない。つまり子どもの製作の場にあつての先生のあり方はどうすればよいか という点で迷いがある。無頓着ではないがしかしどうすればよいかという不安定の気持ちのまま、そのグループの中にいる様子がいかにも明るくない影をおとしている。

教育実習の指導にあたる人は、この類の保育室のふんいきには敏感であつてほしいものである。そしてその場その場での指導には、いろいろの形があろうからただ一つの道だけでは勿論ないのであるが、実習の初期には、子どもたちの一生懸命とか、一心ふらんとかいうふんいきをこわさないことに先づ心してもらいたい。「あなたの作れるもの何でもよいから勢一ぱい作つてごらんさい」という助言によつて彼女はいかにも救われたという表情でせつせと粘土製作にはいつていった。

二、子どもが大工仕事をしている。そのグループで一人の学生が、子どもの手助けをしている。子どもは汗を出して板ぎ

れを切っている。学生は不精らしい姿勢のままて鋸を動かしている。素人大工の手つき、からだつき、勿論結構であり、当然である。ただその熱意のある態度である。子どもたちは一つの小さい板ぎれを切るとき どうしてもこれを切りとるというその強い意気であの小さい手で、最大の力と、そしてそこから出る自然のよい姿勢で鋸を動かしている。ある時は床の上に座りこんで力一杯に金槌をふりあげて釘をうっているものもあれば、片脚を強くふみしめて鋸を動かしているものもある。大人は子どもがする様に、金槌に全身の力を注がなくても比較的らくに釘をうちこむことが出来るであろうし又片脚で強くふみしめなくても、板ぎれが容易く切りおとされる事であろう。ここでいいたいことは子どもの大工仕事の仲間入りをする大人の態度である。大工仕事に対する真げんさの態度である。一生懸命の態度は強さがあり、たのもしさがあり、美しさがある。力あまつて熱意のたりない態度は弱さを示し、みにくさがある。子どもの仲間に入っているものはどこまでも、子どもの態度を損じてはならない、どんな仲間入りをしているも。

三、子どもの表現をどこまでもつづきたい。子どもの絵や、製作の第一のねらいは、子ども一人一人がそれぞれ個人個人の特性、もち味がいきいきと表現するということであろう。絵をかいている時も、おもちゃを作っているときも、そしてその出来上った結果のしまつも子ども自身の手によってすることである。花壇を一クラス全体の共同製作として計画をたてたとして考えて見る。

春の季節の花を子どもたちと話しあってそれぞれにすぎな花を作ることにする。花の種類はもとより数数あるし、同じ花でも作る子どもによってちがって出来る。形の大小、色の調子、簡単なもの、複雑なもの、様様の差はあっても子どもらしさはどれにも共通の表現である。個々の花つくりで終る場合はこれが無難である、がしかしその一人一人が作った花を花壇にまてすすめる場合である。個々の花のあり方そのままの子どもの表現による花壇であるべきものを、時には大人のおよけいな手傳いや、さらにまどめは全部大人の手で、大人を考えて、ということである。そこで折角の子どもの表現のかけが弱くなることである。つまり一人一人子どもらしく作られた草花が、共同製作の花壇の花になる場合に大人の考え

で処理されていて、子ども自身の花壇でなくなることである。

子どもたちが自身の考えて一つ一つの花が配置されてこそ一つ一つの花の感じがその花壇の表現にもつづいてくるわけである。子どもたちはものの大小の関係、遠近、粗密の程度など、まだよく理解出来ていないままに大膽に、無造作に、そこにならべることであろう。

保育室の壁面その他で、子どもの作品で、季節季節の風物花や、鳥や、虫の類などによって美しく飾られていることはどこにもよくみられる情景ではあるが、作品の後半に大人の出すぎた処理によって保育室のふんいきを全然損ねられていることもしばしば見受けられることである。

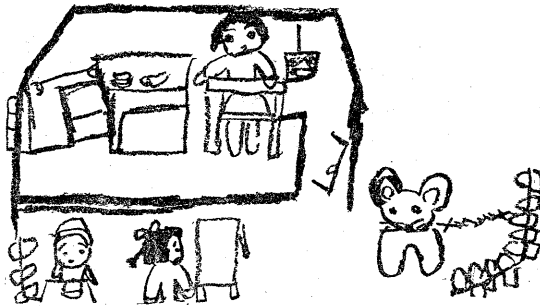
四、おままごとの諸用具について

この頃の保育室にはその片隅に、おままごとの場が常設せられているところが多いようである。まことに子どもたちにとっても、大人にとってもよろこばしい傾向である。保育室の広ささえ許されればよい。そこで問題はその構えや調度にあるようである。台所の戸棚や、垣根にしても、子どもらしさ

の素朴さをくずさないことにあると思われる。専門の指物屋の手によって作られた、ととのいすぎた台所の戸棚や、或は寝台や、テーブルその他の調度はいづれも大人のみた角度からの出来上りで、実際的にはあるけれども、保育室に備えるおままごと用具としてはゆきすぎた点もあり、不調和でもある。素人作りの不手ぎわな、素朴さが失われている。垣根などの調子でも大工さんの作る本ものの垣根の感じは、堅くつきゆうくつな感じがする。素人の大人や、子どもたちとの共同製作によって作られている垣根は材料の関係や、仕事の不手ぎわや、その他のことから、高さや、幅や、或は板の打ち方などの点でまがぬけていても又そこに面白さがある。窓のあけ方、扉の様子、色のぬり方、調度の数数、出来るだけ、子どもの世界の線を守っていききたい。経済的の方面からこれにはどちらからも異議はないはずである。

おままごと遊びの子どものらしさの感触が、そのかまえ全体の上にも、その調度の上にも、あらわれていることがうれしいことであって、子どもの表現活動をどこまでも尊重するものの考えなければならぬ大人の態度であるとも云える。

一、二、三と保育室のふんいきについて、日常幼稚園の実際のところどころの現場から拾ったものをいってみたのであるが、最後にこのいろいろのふんいきを包む大きな輪廓である保育室のかまえはどこまでも大きな太い線で子どもの生活する場所として大人の設計によつて建造されることは又別の



(カットは子供の画いたもの)

意味で根本問題である。つまり幼稚園全体、或は個々の保育室の構はどこまでも、しつかりとして重みがありおちつきのあることは、すべての基盤である。ただ室の明さ、壁その色彩などの点も考えられることは勿論であるが、これがあるあまりに過ぎて、子どもの常時の居所として、おちつきのある態度で遊んでいるかどうかをよく観察することの必要の点である。 10頁に続く

園・保育所の施設・設備等の問題。教育財政問題。

要するに、保育研究は、何も学者や専門研究者の独占するものではありません。私達一人一人が研究者としての責任を負っているのです——幼児達の幸福のために。自分には

研究者としての資質がないなどと弱音をほかないで、どんな小さな問題でもよろしいから勇敢に一つの問題ととくんで下さい。若し自分一人の能力では手におえない時には、共同研究をしてごらん下さい。いろいろな方面の資質、能力を持つている人々が共同して、一つの問題とまとめた課題に立ち向えば、難しい問題でも解決できましょう。ともあれ、私達は、基礎的な識見、教養を高めるように、いつも心がけてゆきたいものです。

参考文献——左に掲げる文献は、私がこの文を書くにあたって参考にしたものですが、これらの文献は、同時に、これから保育研究をしようとする人にとっても、研究のよい手引となるでしょう。

1、城戸幡太郎 幼児の教育 福村書店

昭和二五年

2、宗像誠也 教育研究法 新評論社 昭和二九年

3、阿部重孝 教育研究法(岩波講座「教育科学」第二十冊) 岩波書店 昭和八年

4、石山脩平 教育研究分野の概観(教育大学講座三五「教育研究法」) 金子書房 昭和二六年

個々の研究方法を十分に会得したいと思う人にとっては、これらの文献では不十分です。その場合には、それぞれの方法によって今までになされた研究の報告を精読するのが、もっともよい勉強法であると思います。それには、

5、月刊雑誌「児童心理」 金子書房

6、「幼児の教育」 フレーベル館

7「保育」 昭和出版

のつている研究報告がよいでしょう。

(この一文を草するに当り、特に宗像誠也先生の御指導に対し、厚く御礼申し上げます)

(神戸頌榮保育短期大学)

▽5頁より続く 部屋があまりに明るすぎて子どもが自ら遊ぶ場所を自然に窓を遠ざけている実際をみるときに、これ等の点についても大人は考えさせられることも多いのではなからうか。すべては子どもの生活する場として最もよかれと考えることで常に現在に満足することなく、よりよき環境ふんいきの考慮は勿論であるが、あまりに極端なゆきすぎはお互にいましめたいものである。

日本私立幼稚園連合会編纂

全国私立幼稚園名簿

B 5頁判 一一〇頁 頒価一五〇円

〒 一六円

発売所 株式会社 フレーベル館